

〔近江学研究〕

「近江の絵馬」現況調査 調査報告 3

吉村 俊昭

Name :

YOSHIMURA Toshiaki

Title :

Status Survey of Omi's Emas: Part Three

Summary :

This survey report is a report on the contents of the survey that could not be presented in Bulletin No. 5 and the contents of a survey of previously unexamined Ema that were added in 2016. Although we originally intended to include the entire area survey within Shiga Prefecture, the investigation has not yet been completed. We plan to summarize all the survey contents in the future, including data not yet reported. As for the report in this bulletin No. 6, we will not compare and discuss the emotionality of the Ema, but will describe the features and subject of each Ema.

一、はじめに

「近江の絵馬」現況調査は予定の三年間に加え、二〇一六年も追加調査を行い四年にわたる調査となった。四年目の調査は、諸般の事情で調査が後回しになっていた社寺を対象にした。三年間で県内全域を網羅し大まかに調査したが、まだ県内すべての絵馬の調査が行えたわけではない。今後、調査の全容をまとめるなかで、社寺の縁起を改めて確認するとともに未調査の絵馬を探し補完したいと考えている。今回は、これまでのように地域性を含めた取りまとめはせずに、調査した社寺ごとの絵馬の特徴や特筆すべき画題・内容を主に取り上げた。

二、調査社寺と絵馬の現状

前回の紀要第5号で調査報告2の掲載に間に合わなかった二カ所の報告と合わせて、追加調査の報告を掲載する。

野洲市三上 御神社（みかみじんじや）二〇一六年三月調査

祭神は鍛冶・農耕の天之御影神。式内社。神社本庁の別表社。三上山を神体山とし、養老二年（七一八年）勅命で社殿造営して遷祀されたと由緒がある。十月に執り行われる国の重要無形民俗文化財に指定されている秋季古例祭「ずいき祭」は広く知られ、文化財も多く、鎌倉時代の国宝本殿（写真1）、国指定重要文化財の拝殿、楼門、若宮社などを有する。神体山の三上山は「近江富士」として有名で、山麓からは日本最大の銅鐸を含む二四個の銅鐸が発見されている。三上山といえは古くから語られている「依藤太秀郷のムカデ退治」伝説もある。

絵馬は唯一「神猿図」が残されていて銅鐸博物館（野洲市歴史民俗博物館、野洲市辻町）に受託収蔵されている。今回、この「神猿図」を野洲市教育委員会の許可を得て調査した。

●天明五年（一七八五）「神猿図」（写真2・3）縦六七cm、横八四cm。飾り金具のある家型の絵馬で、金箔地に神猿が烏帽子狩衣を羽織り御幣を持つ姿を描いている。墨書は良く残っていて全文を読み通すことができる。

墨書「天明五乙巳年九月」「江戸四谷内藤宿六軒町 奉納願主 山田久兵衛 今堀甚八」「東都麴坊住 花信齋三輪掌珠藤原在栄圖」

天明五年九月に江戸在住の二人の願主により奉納されたことがわかる。絵師藤原在栄については不明である。

御神社の神猿は、神使いの猿と伝えられる。山王信仰の神



1. 御神社国国宝本殿



2. 御神社神猿図



3. 神猿図顔部分

猿で有名な大津市坂本日吉大社には長澤雪雪筆「猿図」絵馬があり、自然な姿でくつろぐ母子の猿が描かれている（成安造形大学が二〇一五年度に復元模写を行った）^{註1}。また、絵馬ではないが「日吉山王垂迹神曼荼羅」に神猿が衣冠束帯の神として威厳のあるたずまいで描かれ、御神社社絵馬「神猿図」とは趣がまるで違う。「神猿図」とよく似た御幣を持つ猿図が、日野町村井馬見岡綿向神社の馬舎に懸けられている。綿向神社の猿図は、明らかに馬の守護である「厩猿^{うまざる}」の絵馬である。状態は悪く絵の出来いかんについては判断しにくいだが、飾り金具のついた額装がされ装束はつけず御幣を肩に担いでいる。御神社の猿は様々な祭礼で神使いとして関わっていることから、絵馬「神猿図」が表現の類似性から「厩猿」とするのは無理があるといえるが、御幣を持つ猿を描いた「神猿図」は厩猿を除いて他に類を見ない表現である。「日本霊異記下巻第二十四修行の人を妨ぐるに依りて、猿の身を得る縁」に御神社社の「社神として白猿」についての記述があると行俊勉氏（野洲市歴史民俗博物館学芸員）に教示いただいた。ただ、白猿は猴となった罪報を語り自らの供養を願うという内容であり、「神猿図」の猿は神そのものを描いているものではなく、また白猿でもないのでこの説話との関係は見つけられない。

近江八幡市長命寺町 姨綺耶山長命寺（いきやさん ちようめいじ）二〇一六年三月調査

西国第三十一番札所。武内宿禰長寿靈験の因縁と聖徳太子により開基と伝わる（写真4）。長命寺の寺宝調査は昭和五三年、近江八幡市教育委員会により調査が行われており、本調査はその報告書を参照している。重要文化財の本堂には桃山時代初期の「長命寺参詣曼荼羅」と、絵馬「近江八景図」、絵馬「長命寺境内図」の二点がある。近江八景図絵馬は各地に存在するが、県内では数少ない八景図である。

●元禄六年（一六九三）「近江八景図」（写真5・6）縦一四六cm、横一七七cm。背面に釣り金具があり懸額の絵馬であることが確認できるが、現在は衝立に仕立てられている。板横三枚繋ぎ。武内住職によれば寺内に二三房あり、房の途絶えた時に寺宝などが長命寺に集められたということから、そのうちの一坊に掛けられていたものであるかもしれない。

墨書「奉掛御宝前」「元禄六歲西正月吉日」「江戸中橋近江屋 観音講中 敬白」「長浜呉服町 多賀 佐々木氏 川辺領 新川 下新井 源之丞 和吉 藤七 藤兵衛 経之助 忠次」画面上から山沿いに「比良暮雪」「堅田落雁」「唐崎夜雨」「三井晚鐘」「粟津晴風」「石山秋月」「瀬田夕照」、画面下方左から右へ瀬田の唐橋を超えて守山側に「矢橋帰帆」が描かれ、山々や金箔雲の表現などに元禄期の特徴がよく出ている。また八景だけでなく人々の往来や舟、民家、商家が描かれ風俗画としての価値もあるといえる。唐崎神社後方には日吉大社、比叡山が描かれているが山中及び左端上方の神社については不明である。

右下の「長浜具服町」以下の文字は金箔雲の上に書かれているが、上からさらに緑色の雲（真鍮泥の変色か）で塗りつぶされている。文字の粗さや願主とは関わりないことから、江戸時代の絵馬拝見の落書きであろうか。

●万延元年（一八六〇）「長命寺境内図」（写真7）は本堂内陣奥にあり衝立仕立てになっている。絵馬の全体撮影と採寸はできていない。贅を尽くした非常に大きな絵馬で保存状態も良い。南画の流れの力量のある絵であるが絵師の松石貞は確認できない。

墨書「奉献」「萬延紀元歳在庚申秋八月」「宿坊實光院」「願主 村井多士衛門 上田長兵衛村井多平 堀七左衛門 神山久兵衛」「平安 松石貞亨」

本堂下の庫裡には三点の絵馬が存在する。

●慶応元年（一八六五）「黒馬図」（写真8）縦八二cm、横一一二cm。金箔地に黒馬を描く。黒の額装。江戸末期から明治にかけて活躍した四条派の画家「塩川文麟」の絵馬である。杉板材の油分で変色が見られるが概ね状態は良い。さほど大きくない絵馬であるが静かに立つ黒馬は威厳を感じる。復月は十一月の別名。

墨書「奉献為祖先冥福」「慶應新元歳治乙丑復月」「平安 塩文麟 印」

●寛政四年（一七九二）「武内宿禰図」（写真9）採寸せず。神功皇后とともに描かれることが多いのだが寺の靈験伝承からか



6. 瀬田の唐橋守山側に描かれた茶店



4. 長命寺山門から本堂を望む



7. 長命寺境内図部分



5. 長命寺近江八景図

武内宿禰のみ描かれている。晩夏は六月の別名。

● 墨書「奉納 寛政四壬子晩夏」「東直時再拝」

● 天保九年（一八三八）「宝船」（写真10）採寸せず。恵比須、大黒天を描く。

● 墨書「奉納」「天保九戌四月八日」剥落がひどく教育委員会報告書に倣う。

近江八幡市多賀町 円満寺（えんまんじ）

八幡山日牟礼八幡宮の東、臨済宗永源寺派の寺院。南北朝時代に永源寺の開祖寂室元光が開基したと伝わる。本堂・庫裏・金毘羅堂・観音堂が立つ。金比羅堂、観音堂に縁のある多くの小絵馬が存在するが、現在は栗東歴史民俗博物館（栗東市小野）に受託収蔵されている。画題は博物館の名称を使用した。

● 安政三年（一八五六）「烏天狗図」（写真11）縦七三cm、横九一cm。通常向い天狗として二面描く烏天狗面だが一面を描く。金毘羅堂が境内にあり、金毘羅の使いの烏天狗である。

● 墨書「奉納」「大橋氏」「安政三丙辰九月吉日」

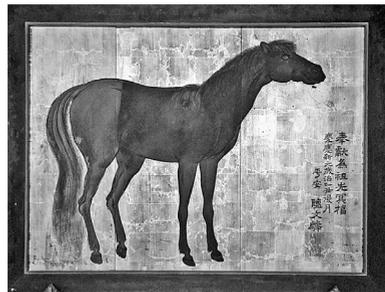
● 元治元年（一八六四）「白馬図」（写真12）縦四五cm、横六四cm。甲賀市水口町結城観音堂に表現の似た小絵馬がある。同じ絵馬師か絵馬師集団によるものかもしれない。

● 墨書「奉納」「寅年女」裏「元治元年甲子四月吉日」「福濡屋米吉」

● 「黒馬図」（写真13）縦四八cm、横六六cm。白馬図に同じ。



10. 宝船恵比寿大黒天図



8. 塩川文麟筆馬図



11. 烏天狗図



9. 武内宿禰図

状態は絵の具の浮きが多く、はなはだ悪い。

墨書「奉納」「大橋氏」

●慶應二年（一八六六）「橋弁慶牛若丸図」（写真14）縦五三 cm、横九六 cm。

墨書「奉納」「京都仙台屋鋪 施主大川仙太郎」「慶應二年寅九月吉日 新調」額部分

「春山 印」画中の絵師名

●安政四年（一八五七）「合戦図」（写真15）縦四五 cm、横九一 cm。右馬上の武士が金碎棒を持つことから、三好三人衆のうち岩成友通が思い浮かぶ。

墨書「奉納」「安政四丁巳夏」「藤原氏 戌歳男」

●「男拝み図」（写真16）縦三四 cm、横四六 cm。拝み絵馬は祈願内容を書かないのが普通なので内容は不明だが、画中、提灯の社紋が法輪紋となっているので、太郎坊阿賀神社（東近江市小脇町）との関係がうかがわれる。

墨書「奉納」「三カ年間」「志し年男」額部分

●文久三年（一八六三）「女拝み図」（写真17）縦二二 cm、横三一 cm。

墨書「奉納」「巳年女」「文久三歳極月十一日」極月は十二月の別名。

●「神影向図」（写真18）縦三九 cm、横五三 cm。ご神影は分からないがおそらく垂迹神であろう。

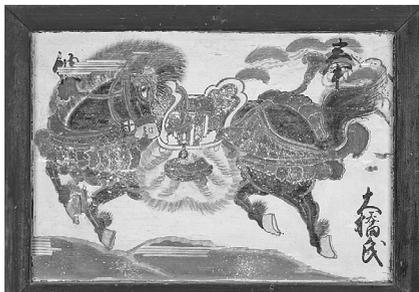
墨書「奉納」



12. 白馬図



14. 橋弁慶牛若丸図



13. 黒馬図



15. 合戦図

●「梵天来迎図」(写真19) 縦四〇cm、横五九cm。梵天(御幣)が金属製で五色の雲と人物が木製のレリーフになっている。金毘羅信仰では金幣が象徴として描かれ御幣来迎が各地に見られる。この絵馬も金毘羅堂に関わったものと考えられる。

墨書「奉納」「浅井村 深尾氏」額部分

●明治二年(一八六九)「賽子断ち図」(写真20) 縦三〇cm、横三七cm。サイコロを斧で割る図柄。断ち事絵馬。

墨書「奉納」「明治二巳年三月吉日」「二六歳男」

●天保九年(一八三八)「酒断ち図」(写真21) 縦三一cm、横四三cm。年数が書かれていることから断ち事絵馬であろう。伊勢えびが酒を飲んでいるようにも見えるが、伊勢えびが何を意味するか不明。

墨書「奉納」「天保九年戊戌五月吉日」「奥野氏 拾ヶ年間

二一歳男 五ヶ年間二二歳女」

●嘉永七年(一八五四)「常盤御前図」(写真22) 縦九二cm、横五一cm。断ち事鏡もの絵馬。額縁の各辺に鏡前をかたどった銅版が打ち付けられ禁酒三年の文字が朱書きされている。常盤御前と酒は関係がない。

墨書画中「奉納」「願主 清一郎 □□ 伊三郎」額「嘉永七年」

「寅之文月日」「三年禁酒」絵師名が書かれているが判読できない。文月は七月の別名。

●安政七年(一八六〇)「琴平神社社頭図」(写真23) 縦五三cm、横六三cm。



18. 神影向図



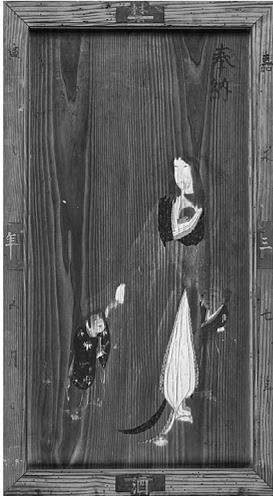
16. 男拜み図



19. 梵天来迎図



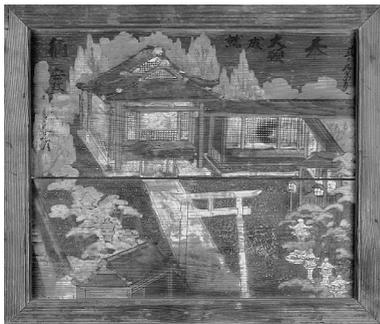
17. 女拜み図



22. 常盤御前図と酒断ち祈願



20. 賽子断ち図



23. 琴平神社社頭図



21. 酒断ち図

- 墨書「大願成就」「二十九才男」「安政七年□三月」
- 「山姥金太郎図」(写真24) 縦七六cm、横六一cm。子供の成長の祈願絵馬。
- 墨書「奉納」「願主 朝田氏」額部分「有楽 印」画中
- 「白馬図」(写真25) 縦二八cm、横四〇cm。子供の成長の祈願絵馬。腹掛けに琴平神社の寺紋がある。
- 墨書表「奉獻」「五歳男子」裏「明治一九年戌六月 為心町高山話助 長男平次郎」
- 大津市石山寺 石山寺(いしやまでら)
- 西国三十三所観音霊場第十三番札所。
- 奈良時代後期、聖武天皇の発願、良弁により開基。寺名由来の硅灰石がそびえ、国宝の本堂・多宝塔をはじめ、経典・聖教類、仏像、絵巻など多くの国宝、重要文化財がある。近江八景のうち石山秋月の場所。
- 絵馬は本堂に二点、宝蔵に十数点ある。石山寺には調査趣旨をご理解いただき、



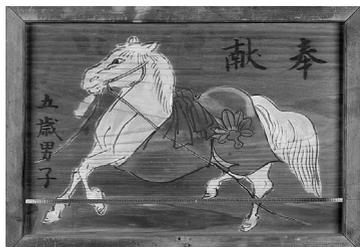
27. 田村麿退治夷賊之図



24. 山姥・金太郎図



28. 田村麿退治夷賊之図部分の地藏菩薩



25. 白馬図

二期に分けて収蔵場所から移動させての調査が可能な絵馬のみ調査した。本堂の絵馬以外は、収蔵されたままで公開されていない。絵馬の画題はついていないが参考にした「扁額規範」等の画題や、よく使用される画題を当てはめた。(写真26)

●元文四年(一七三九)「田村麿退治夷賊之図」(写真27・28)縦一九cm、横一四六cm。構図は清水寺(京都市東山区清水)の海北友雪画の田村麿退治夷賊之図(横六間、縦二間とある)の写しである。海北友雪の絵馬に比べかなり小さめであるため、元々の絵の中央部陸上の混乱する夷賊を省き、田村麿と海上の夷賊だけを描いている。双方の軍勢は小ぶりで大きくさの感はない。右岩上に、敵の矢を防ぐ地藏菩薩と敵に矢を射る毘沙門天等、右中央に軍配を打ち振る田村麿が描かれている。田村麿が信心していた観世音は海北友雪の絵馬には登場しないが、ここでは田村麿の頭上に描かれている。夷賊は鬼の姿に変えて描かれ、彼らに乗ってきた船も得体の知れない乗り物に変わっている。田村麿の夷賊退治説話をより分かりやすく解釈し誇張も入れたためであろう。絵師吉川伯定は確認できない。

墨書「奉懸 御寶前」「元文四歳未九月吉日」「吉川伯定 印」「願主 梅鉢屋重兵衛 梅鉢屋庄兵衛 同熊之助 絵馬屋嘉兵衛」

●寛保三年（一七四三）「巴御前図」（写真29・30）縦八四cm、横一〇四cm。典型的な巴御前の図柄で木曾義仲に従軍し、関寺の合戦で内田三郎家義の首をかく場面である。木曾義仲の妾で平家物語や源平盛衰記などにその詳細が記され、様々な説話が残る巴御前は女武者として特に人気があった。福岡県新宮町磯崎神社に享保二年（一七一七）奉納のほぼ同形同図同寸大の巴御前図がある。山形県寒河江市寒河江八幡宮にも享保三年（一七一八）奉納の同図のものがある。「厳島絵馬鑑」には日州（宮崎県）飢肥領崎多右衛門が寛延四年（一七五二）に奉納した御前図絵馬があったことが記されていて、これも同図である。巴御前図は粉本が流布していたのであろう。厳島神社の巴御前図は石山寺の巴御前図と同じ日州飢肥からの奉納であり、わずか八年しか奉納時期が異なることかなにかしら関連があると思える。石山寺巴御前図絵馬は金箔地に大きく両騎馬武者が描かれ躍動感があり武者、馬、甲冑にわたり力強い詳細な表現である。巴御前の顔部分が剥落して下絵の線しか見えないのは残念である。

墨書「奉掛御寶前」「寛保三癸亥年五月吉日」「日州飢肥之住 山田武昭女」

●宝暦十年（一七六〇）「宇治川の先陣争い」（写真31・32）「佐々木四郎高綱（左）」と「梶原源太景季（右）」の対。縦八五cm、横一〇九cm。両絵馬は同寸。この画題も「平家物語」「源平盛衰記」に記され有名なテーマであり、武者絵馬の画



33. 曳馬図



29. 巴御前図



26. 石山寺宝蔵にて調査撮影風景



30. 巴御前図部分

題として多く用いられているものである。木曾義仲軍と源義経が宇治川を挟んで争い、義経軍の先陣争いをした二人の武者が佐々木高綱と梶原景季である。絵馬は互いに策をめぐらせ、まさに先陣を競おうとしている様子を二枚に描き分けている。左側の絵馬佐々木高綱は振り返り梶原景季に向かって「腹帯のゆるみがある」と伝えている。馬は白馬の「いけずき」。鎧には四つ目結の家紋が描かれていることで佐々木高綱に間違いはないであろう。右側の絵馬梶原景季は弓の弦を口にくわえて腹帯を締めようとしている。鎧の家紋が並び矢で馬は黒馬「するすみ」である。「源平盛衰記」の話を忠実に表し、非常に丁寧で臨場感のある絵になっている。絵師「藤原守業」は「作之鞍鎧目利伝書」の著者として名が挙がるが詳細は不明。奉納者の「三井高彌（みついたかひさ）」は三井新町家第三代目当主であることが判明したが詳細は未調査である。絵馬の板、額ともに非常に丁寧に作りで傷みはほとんどない。絵の保存状態も非常に良い。「平家物語」の先陣争いについては紀要第5号解説の項でも紹介している。

墨書「取次 松中坊」「法橋探川藤原守業画 印」「宝曆十庚辰歳三月吉日」「三井高彌」

両絵馬とも右左の書き順が違うが同じ内容の墨書である。

●元禄十年（二六九七）「曳馬図（元禄）」（写真33）縦一一一cm、横一一一cm。非常に状態が悪く、全体に絵の具



31. 宇治川の先陣争い・佐々木四郎高綱



32. 宇治川の先陣争い・梶原源太景季



35. 曳馬図唐鞍部分



34. 曳馬図（本堂の衝立）

の浮きが見られる。大きな絵馬であることから、収蔵場所から動かすだけで一挙に剥落が進むような状態である。金箔地に太めの力のある墨線で馬と舎人を描いている。馬の表現は躍動感にあふれ、舎人の表現も良い。

墨書「奉掛御寶前」「元禄十丁丑年七月吉日」「願主敬白」

●「曳馬図」(写真34・35) 縦中央一二九cm、横一五九cm。家型絵馬。現在は本堂内の衝立に仕立てられている。曳馬を後方から描く珍しい構図である。馬の頭部など剥落がひどく細部は明らかでないが、流れるような墨線が見て取れる。馬の躍動感や馬を押さえようとする舎人の力の入った動きを良く表現している。左の舎人は顔部分が良く残っている。絵のなかで比較的状态の良い唐鞍は、金泥の盛り上げ文様や緑青地に描かれた文様は精緻で美しい。桐板を八枚合わせているが、継ぎ目が分からないほど丁寧なつくりである。奉納年は不明だが江戸前期まで遡るのではないだろうか。

墨書「石場政隠筆 印」

●寛永十二年(一六三五)「繫馬図」(写真36) 縦一〇〇cm、横一三二cm。額下部は損失。大津市指定文化財。いささか足先の描き方に不安定さがある。馬の動きが少ないものの堂々とした白馬である。高月観音堂に寛永十七年奉納の繫馬も静かな表現で頭の向きが違うがよく似ている。頭部やたてがみの表現に江戸初期の繫馬図の特徴が表れている。左半分に落書きのような墨線が残る。裏面に万治二年(一六五九)上総からの西国巡礼

参詣者の走り書きがある。「この絵を見た」と書き記しているので、万治頃には寺内の手の届くところに掛けられていたのであらう。

墨書「奉掛御寶前」「寛永十二乙亥捻」「五月吉日」「勢州度

会住 □□」裏「万治二年亥ノ七月十二日」「上総国折戸村 鈴木長八郎 同木戸村六人 同道十人 西國一見之時分書をき申し候」

●寛永十八年(一六四一)「繫馬図」(写真37・38) 縦中央一四一cm、横一七六cm。家型絵馬。現在は本堂内に衝立に仕立てられている。繫馬の多くは繫がれることを嫌うような、躍動的な表現が多いのだが、その中でも足を跳ね上げ綱を引きちぎ



36. 繫馬図



37. 繫馬図(本堂の衝立)

ろうと大きく首をひねり地に頭を擦りつけるような構図は珍しい。金箔地に描かれているが、金箔部分は漆の下地で珍しい。額縁との境目の漆の様子から画面と額縁を合わせて作成されたと考えられる。馬の毛並みには墨線に金泥で細線が書き加えられ、仏画あるいは仏像を連想させ、工芸的な一面が見受けられる。絵師立齋は不明。

墨書「奉□」「寄進」「寛永十八歳 月吉日」「立齋」

●享保五年（一七二〇）「群馬図」（写真39）縦一〇一cm、横一九〇cm。様々な毛色の馬が十二頭、牧で群れる様子が描かれている。白く残る部分は金箔が貼られていた痕跡がある。馬の表現はバランスが悪く上手いとは言えない。画面構成も不思議な表現となっている。

墨書「奉掛御寶前」「享保五庚子歳□月吉日」

●「朝比奈門破り図」（写真40）縦一四五cm、横一七八cm。額なし。ほとんどの絵の具が剥落して下地の墨線だけが残る。画面からはみ出るほど大胆に描かれ、表情も豊かである。江戸前期鳥居派の浮世絵を連想させる。朝比奈三郎義秀は、和田義盛の三男で強者として数々の伝説があり、歌舞伎の演目や浮世絵に描かれ庶民に人気の武将であった。中でも鎌倉御所の総門を押し開けた朝比奈門破りの話は多くの絵に表された。門破りについては紀要第5号で詳細に解説している（註2）。

●天保十二年（一八四一）「弁慶・牛若丸図」（写真41）縦一二四cm、横一九〇cm。弁慶の七つ道具をしっかりと描くため



40. 朝比奈門破り図



38. 繫馬図尻尾部分金泥線描き



41. 弁慶・牛若丸図



39. 群馬図

弁慶は背中を向けている。そのためか薙刀の持ち手が変わって左利きになっている。義経の衣の紋も源氏の笹竜胆が丁寧に描かれ、草双紙を絵馬にした趣がある。表現はやや拙いが、要所に金箔を用い、明るいベロ藍のような青色や朱を多用して色彩豊かに仕上げている。

墨書「湖東石部驛 内貴竹應画 印」「天保十二年辛丑初夏」
願主「植村仁左衛門」以下二三名が書かれている。初夏は四月の別名。

三、おわり

今回で「近江の絵馬」現況調査報告が最後になるが、調査時期の関係から報告に上がらない絵馬がある。次年度、この調査全体をあらためて「近江の絵馬」としてまとめる予定をしているので、その中で未報告分を掲載するつもりである。また、調査全体で取り扱わなかった社寺および絵馬がある。高島市マキノ町海津天神社の狩野山楽筆「繫馬図」、「三十六歌仙図」や日牟礼八幡宮の菱川孫兵衛筆「安南渡海船額」など文化財であり、あまりにも有名な絵馬である。滋賀県内の絵馬の状況調査を優先し、保存管理、研究が進んでいる絵馬は調査対象に含めなかった。ただそれらの絵馬は絵馬研究には欠かせないものでもあり、まとめのなかで先人の研究成果を紹介したいと考えている。

最後に、今回報告した絵馬に関わって様々な方々のご協力、ご教示をいただいた。銅鐸博物館（野洲市歴史民俗博物館）学芸員行俊勉氏、栗東歴史民俗博物館学芸員中川敦之氏、長命寺住職武内隆韶氏、同寺武内健斗氏、石山寺管理部遠江隆行氏および関係の方々にお礼申し上げます。

物語解説

田村磨退治夷賊之図（たむらまろいぞくたいじのず）扁額規範（へんがくきはん）文中より抜粋

同十四年（延暦）東奥の残賊高磨并に悪路王の二人起て達谷が窟に達籠り、辺境を侵し猛威を震ふこと先賊倍し、大に勢ひを張つて既に勢州まで責上るよし、国々よりの奏類なり。誌書には延暦二十年高磨、悪路王達谷が窟より起り、駿河国清見の関まで責上ると云う。清水寺縁起には延暦十四年蝦夷賊起り勢州まで責上ると記せり。帝都には諸卿ことに驚有て、田村磨を征夷大將軍に任じ、節刀を賜ふて凶徒退治の宣旨あり。田村磨勅を奉り、日頃清水寺の観世音を深く信じたれば、当寺に詣て怨敵悉退散を祈念す。延鎮和尚為に勝軍地藏菩薩、勝敵毘沙門天の両像を造つて征敵勝軍の法を修す。田村磨は官軍を率ひて勢州に発向す。夷賊勇を震ひ官軍を防ぐこと龍の雲中を走り虎の怪風を起すに似たり。時に陣中より一僧一男現じ僧は敵の矢を防ぎ、男子は寶箭を放ち賜ふ。矢雨の降るが如く。夷賊の勢ひ忽ちに墮て乱れ騒ぐに、また大風起て敵を吹倒し大雷頻に震て賊中に墮落たれば、田村磨孟々男。敵を粉の如く砕きたれば夷賊怪風に船を覆し官軍に追はれ七烈八裁に敗て奥州に引退く。田村磨賊を逐て奥に下り賊主高磨は射斃し悪路王を生捕て誅拭し大に凱旋を唱えて帰洛あり。

源平盛衰記 卷第三十五

高綱渡宇治河事（たかつつなうじがわをわたすこと）

平等院の小嶋崎より武者二騎蒐出たり。梶原源太と佐々木四郎と也。景季が装束には木蘭地の直垂に黒革威の鎧に三枚甲の緒をしめ、滋藤の弓の中を取り二十四差したる小中黒の矢負、練鍔の太刀佩て、鎌倉殿より給りたる磨墨と云名馬に、黒塗の鞍置て騎たり。高綱は褐衣の直垂に小桜を黄に返たる鎧に、鍬形打たる甲に笛籐弓の真中取。二十四差たる石打の征矢頭高に負、噴物造の太刀帯て、是も鎌倉殿より給たる生暖（いけずき）に、黄覆輪の鞍置てぞ騎たりける。誰か先陣と見処に、源太颯と打入て遙に先立けり。高綱云けるは、如何に源太殿、御辺と高綱と外人になれば角申殿の馬の腹帯は以外に窺て見物。此川は大事の渡也。河中にて鞍踏返して敵に笑はれ給なと云ければ、左も有らんとて馬を留、鎧踏張立拳、弓の弦を口に噉、腹帯を解て引詰々々しめける間に、高綱さつと打渡しめ二段計先立たり。源太たばかられけりと不安思て、是も打浸しめ渡しけるが、馬の足綱に懸て思様にも不被渡。高綱は究竟の逸物に乗れば、宇治河はやしといへ共、淵瀬を不云さめかして金に渡し、向の岸近く成て、高綱が馬綱に懸て足をさと歩除ければ、自元期する事なれば、太刀を抜、大綱小綱三筋さと切流し、向の岸へ打上り、鎧踏張弓杖突て、佐々木四郎高綱、宇治河の先陣渡たりやと名乗も果ぬに、梶原源太も流渡に上りにけり。

巴関東下向事（ともえかんとつにげこうのこと）

角関は木曾殿の乳母子に、中三権頭兼遠が娘に巴と云女也。主の遣の借ければ、向後を見んとて御伴に侍ると云。鎌倉殿の仰を蒙、勢多手の先陣に進るは、遠江国住人内田三郎家吉と名乗進けり。巴は、一陣に進むは剛者、大將軍に非ずとも、物具毛の面白きに、押並て組しや首ねち切て軍神に祭らんと思けるこそ遅かりけれ。手綱かいくくり歩せ出す。去共内田が弓を引ざれば、女も矢をば不射けり。互に情を立たれば、内田太刀を抜。されば女も太刀に手を懸ず。主は急たり馬は早りたり。巴、内田、馬の頭を押並、

鎧と鎧蹴合するかとする程に、寄合互に音を揚、鎧の袖を引違たり。やをうとぞ組たりける。聞る浦丈の名馬なれ共、大力が組合たれば、二匹の馬は中に留て働かず。内田勝負を人に見せんと思けるにや、弓矢を後へ指廻し、女が黒髪三匝にからまへて、腰刀を拔出し、中にて首をか、んとす。女是を見て、汝は内田三郎左衛門とこそ名乗つれ、正なき今の振舞哉内田にはあらず。其手の郎等かと問ければ、内田我身こそ大將よ、郎等には非ず、行跡何にと申せば、女答て云。女に組程の男が、中にて刀を抜、目に見する様やは有べき。軍は敵に依て振舞べし。故実も知ぬ内田哉とて、拳を握り、刀を持たる臂のか、りをしたたかに打。余に強く被打て把る刀を被打落、やをれ家吉よ、日本一と聞たる木曾の山里に住たる者也。我を軍の師と憑めとて、弓手の肘を指出し、甲の真顔取詰て、鞍の前輪に攻付つ、内甲に手を入れて、七寸五分の腰刀を拔出し、引あふのけて首を搔。刀も究竟の刀也。水を搔よりも尚安し。馬に乗直り、一障泥あふりたれば、身質は下へ落にける。

註

1. 成安造形大学附属近江学研究所紀要第4号50頁
成安造形大学附属近江学研究所文化誌「近江学」第8号85頁86頁87頁
2. 成安造形大学附属近江学研究所紀要第5号73頁

参考文献

- ・合田珉和・北川春成縮図「扁額軌範」全五巻 吉野屋大谷仁兵衛 文政二年
- ・渡辺黄鶴著・渡辺対岳縮図「蔽島絵馬鑑」全五巻 天保三年刊 嘉永元年後印
- ・「近江八景之図」江州志賀郡瀬田橋西 田中屋惣七板 江戸時代
- ・臨川書店「新修京都叢書」第八巻 扁額軌範・花洛絵馬評判 一九九四年第二刷
- ・木村至宏「図説近江古寺紀行」河出出版社 一九九五年
- ・司馬遼太郎・白洲正子・水上勉「近江路散歩」新潮社 一九八八年
- ・信多純一「祈りの文化―大津絵模様・絵馬模様―」思文閣出版 二〇〇九年
- ・須藤功「大絵馬ものがたり5 昔話と伝説の人びと」農山漁村文化協会 二〇一〇年
- ・岩井宏實「絵馬に願いを」二支社 二〇〇七年
- ・大津市歴史博物館「庶民の祈り―近江の絵馬― 一九九一年
- ・茨木県立歴史館「祈りの歴史と民俗 絵馬」一九九八年
- ・福岡県立美術館「神にささげた祈りの美 絵馬」一九九九年
- ・佐藤健一郎・田村善次郎「祈りの民俗誌」八坂書房 二〇一三年
- ・瀬川欣一「近江の昔ものがたり」サンライズ出版 二〇一〇年
- ・歴史魂編集部「月岡芳年の武者絵 大日本名将鑑」アスキー・メディアワークス 二〇一二年
- ・石川透・星瑞穂「源平盛衰記絵本を読む 源氏と平家合戦の物語」
- 三弥井書店 二〇一三年
- ・松葉涼子 立命館文学第六三〇号 論文「近世期の画像資料に見る門破り画像の受容と展開」二〇一三年
- ・梶原正昭 校注「平家物語」おうふう(桜楓社) 一九八四年
- ・遺藤嘉基本・春日一夫 校注「日本畫異記」岩波書店 一九七一年
- ・藤本久兵衛「源平盛衰記 卷三五〜三六」国立国会図書館デジタルコレクション 寛永年間 [Infond.jp/pid/2544861](http://infond.jp/pid/2544861) 二〇一六 十二 六閲覧
- ・岡登貞治「日本の文様図鑑」東京道出版 一九六九年
- ・岡登貞治「文様の辞典」東京道出版 一九六八年
- ・徳島県立近代美術館作家詳細情報 www.arttokushima-ece.jp/srch/
- ・塩川文麟二〇一六 十 二六閲覧
- ・国立国会図書館サーチ iss.ndl.go.jp/books/ 藤原守業二〇一六 十二 二〇検索
- ・三井家編纂室編「稿本三井家資料」一橋大学附属図書館 [Cinii \[cinii.ac.jp/ncid/三井高彌1016_111_110\]\(http://Cinii.cinii.ac.jp/ncid/三井高彌1016_111_110\)検索](http://Cinii.cinii.ac.jp/ncid/三井高彌1016_111_110)

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第6号

発行日 平成29年3月24日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937